

八尾・よろず考古通信

八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌 年 2 回発行



平成 27 年度秋季企画展『やおの古墳時代〈中期～後期〉—渡来文化とくらし—』から

1. はじめに

27 年度の秋季企画展として、八尾市域の古墳時代中期～後期を対象とした『やおの古墳時代〈中期～後期〉—渡来文化とくらし—』と題した企画展を行いました。展示では、「Ⅰヤマト政権から河内政権へ」「Ⅱ中河内地域における古墳時代中期～後期の渡来文化の特徴」「Ⅲ市域の古墳時代中期～後期の主な遺跡」の小題を設けました。

4C後半～5C代は、河内に基盤を置く新たな勢力が台頭した所謂「河内政権」の時代で、大阪平野南部の古市・百舌鳥に「倭の五王」が大古墳群を形成した時期にあたります。この時期は、東アジアの国際情勢の大きな変動に即応して朝鮮半島南部を中心とした先進的な生産・土木技術をはじめとする生活様式や学術、思想などの文化史的な分野で倭国の文明化が急速に変革した時代であったといえます。企画展では、河内政権の推進に大きな役割を果たした中河内地域の当該期の集落動向を通してその役割を考えてみました。ここでは、これらの一部を抜粋して紹介します。

2. ヤマト政権から河内政権へ

邪馬台国から初期ヤマト政権の成立をみた古墳出現期の3C中葉～4C中葉の奈良盆地南東部では、大型前方後円墳で構成される纏向・柳本・大和・鳥見山古墳群が形成されており、この地域一帯を中心に初期ヤマト政権の主勢力があったことを示しています。ところが、4C中葉～後半には佐紀陵山古墳(白葉酢媛命陵古墳)、佐紀石塚山古墳(成務天皇陵古墳)、五社神古墳(神功皇后陵古墳)、宝来山古墳(垂仁天皇陵古墳)などの佐紀古墳群の西群・南群を中心に奈良盆地北部に大王墓を主体とする古墳群が造られており、奈良盆地南東部から北部へヤマト政権内の主要勢力が移動したことを示しています。これらの背景に、313年に中国王朝の統治機関である楽浪郡が朝鮮半島北部勢力の高句麗に滅ぼされるなどの中国王朝の衰退を契機とした、4C中葉～後半の倭国と朝鮮半島諸国(高句麗、新羅、百済、伽耶諸国)との軍事的な緊張関係があったと考えられています。

倭国は百済との同盟関係を基軸として、南下政策を押し進めた高句麗やそれに臣従する形の新羅に対しては強硬な外交を推進しました。石上神宮所蔵の「泰和四年(369年東晋の年号)」銘の七支刀は、百済と倭の軍事同盟を記念して百済王から倭国王に贈られたもので、当時の社会情勢の一端を知る資料と考えられています。このような朝鮮半島における積極的な外交政策を推進し、鉄などの大陸系の文物の一元的な獲得を目指したのが佐紀古墳群中の西群・南群を形成した佐紀政権とも称される政治集団で、近江・山城地方の政治集団との婚姻関係を通じて木津川・淀川水系を掌握し、従前の支配範囲に含めてさらに山城・摂津・河内北部・近江・丹波地域に勢力圏を拡大させたことが同時期の古墳分布から推定されます。



図 1 河内・大和の前期～中期の主な古墳と中河内地域の主要遺跡

- 目次**
- ◆平成 27 年度秋季企画展『やおの古墳時代〈中期～後期〉—渡来文化とくらし—』から(p 1～3)、
 - ◆平成 27 年度のイベントから(p 3) ◆よろず考古学コラム第 14 回(p 4)、イベント案内/編集後記(p 4)

3. 中河内における古墳時代中期～後期の渡来文化の特徴

1) 中河内における渡来文化の状況

中期(4C末～5C) この時期を中心に、倭の朝鮮半島への進出に伴う社会情勢の混乱期に大陸や朝鮮半島南部地域から人々が渡来したことが『記紀』などの文献や考古資料から知ることができます。渡来人の中には、^{いまきのてびと}今来才技と呼ばれた技術者や知識人が多く含まれており、これらの渡来人により持ち込まれた新出の技術・文化は、生活様式の変化や『記紀』に記された「難波堀江」の開削や「^{まんた}炭田堤」の構築記事などの河内湖沿岸の大規模開発を推進した要因の一つであったことが推定されます。



写真1 韓式系軟質土器(甑・鍋)(5C前半)
《八尾南遺跡第18次、久宝寺遺跡第70次》

河内政権が形成した古市古墳群の北方に位置する八尾市域を含む中河内地域は、河内湖・大和川の水運や大阪湾に注ぐ河口に設けられた住吉津や難波津を經由して、大陸や朝鮮半島からの外来文化の門戸としての役割を果たしており、^{ひんぱん}頻繁な文物交流の実態が数多くの考古学資料から知ることができます。

中河内地域で、最も早く渡来文化を導入した地域は、市域南西部の八尾南遺跡・木の本遺跡や西接する大阪市の長原遺跡を含む一帯です。この地域は、古市古墳群中の北縁にあたる津堂城山古墳の北方に近接するほか、時代は少し後になりますが『日本書紀』「雄略十四年正月条」に記された住吉津を起点として東西に伸びる「^{しはつみち}磯齒津路」が通るなど、「河内政権」の中でも特に重要な地点の一つであったと推定されます。

後期(6C) 密接な関係にあった百済が475年に高句麗に攻められ百済の蓋鹵王が敗死し、王都が漢城から^{ゆうしん}熊津に移る朝鮮半島南部での政治動乱に連動して両国間で頻繁な往来があったことが『日本書紀』継体記・欽明記に記されています。これらの政変に伴う交流を通じて、百済の^{ふせい}部制の影響を受けて6C前半以降には^{へみん}部民制や力バネ制、^{みやげ}屯倉制の充実、^{こくぞう}国造制などの諸制度や渡来系氏族を重視した文字による支配方法が整備されるなかで「河内政権」の政治体制が確立しました。さらに、百済から伝播した5C末以降の横穴式石室の導入による墓制変化や6C中葉以降の仏教の浸透は精神文化においても多くの影響を与えました。市域における後期の渡来系文物は、中期に比べて極端に少ない傾向があります。6C前半の韓式系平底鉢、ミニチュア^{かまど}竈・鍋などの炊飯具の副葬が見られた高安千塚古墳群の郡川16号墳などは朝鮮半島南部の埋葬習慣から渡来人が葬られた古墳と考えられます。



写真2 郡川16号墳出土の韓式系軟質土器(6C前半)

2) 新たな土器の出現と生活様式の変化

4C末に朝鮮半島南部から須恵器、韓式系軟質土器の製陶技術が導入されました。それまでの主要な日常雑器であった赤褐色系の軟質土器の^{はしき}土師器に、韓式系軟質土器と窯を用い高温で焼かれた硬質の須恵器が追加されています。韓式系軟質土器のなかには、それまでの土師器に無かった平底鉢、甑、長胴甕、把手付鍋、移動式^{かまど}竈などの器種が含まれており、特に竈・長胴甕と蒸気孔を持つ甑のセットで使用された調理具の出現は、新たに蒸す調理法をもたらしました。須恵器においても^{ふたつき}蓋杯などの器種が加わり、調理・食事方法などの食生活が全般にわたり変化したことが^{うかが}窺えます。この時期を境として土師器、韓式系軟質土器、須恵器を主体とする土器構成が一般化し、その機能に応じて使い分けが行われます。



写真3 八尾市域出土の5世紀代の土師器・須恵器

3) 手工業の広がり

鉄鍛冶

古墳時代中期～後期の鉄鍛冶関連遺物には、鉄滓・粒状滓・鍛造剥片や鉄を溶かす鍛冶炉に風を送る鞴の先端に付けられた鞴羽口のほか、金床石、砥石などの鍛冶具があります。それらの遺物に伴って韓式系軟質土器が出土することから渡来人が深く関与していたことが推定されます。

中期の鉄鍛冶は前期と同様、朝鮮半島の伽耶地域から持ち込まれた鉄素材(鉄錠)を鍛冶炉で加熱し半溶解状態から整形する鍛練鍛冶が主体で、鉄滓・粒状滓・鍛造剥片などは鉄素材から不純物を取る段階に生じた副産物と考えられています。中河内地域で最も古い鍛冶工房遺構は、八尾南遺跡第18次の5C前半のもので、「コ」の字形の周溝(SD215)で区画された建物(約3m方形)です。その地点より北西約500mの大阪市長原遺跡O2-8次では隣接する2棟の工房遺構(SB005・006)が検出されています。5C前半のもので、八尾南遺跡例と同様、「コ」の字形の周溝により区画された建物(約8m方形)の中央部に溝に、平行した2個の柱跡があるほか、隣接する位置に朝鮮半島に由来する大壁建物2棟が配置されています。

馬飼

5C前半以降、瓜破台地北辺から河内湖周辺部で渡来人を介して馬の飼養や騎馬の風習が一般化し、馬飼いを職掌とした人々の集落が出現したことが、馬骨・馬歯・馬具・馬形埴輪の存在から推定されます。これまでの調査成果から、中河内地域では5C前半から馬の飼養が開始され、そのピークが5C中葉～後半であったことが推定されます。八尾南遺跡第8次調査では、5C前半の大型井戸(SE4)から木製鞍(前輪)が出土しています。この井戸に付随して馬洗い場と推定される方形土坑、馬を管理した人々の掘立柱建物、厩建物のほか、溝や柵列で区画された西側に広がる空閑地で発見された円形の窪みが蹄跡と推定され、その部分が放牧地であったと考えられます。また西接する長原遺跡においても、馬に関連した遺物が5C代を中心に見られるため、長原・八尾南遺跡一帯で馬の飼養が盛んであったことを物語っています。



写真4 鉄鍛冶工房のムラ跡(5C前半)
《八尾南遺跡第18次調査》



写真5 鉄鍛冶工房から出土した遺物
〔鞴羽口・鉄滓・金床石・砥石〕
(5C後半)《太田川遺跡2005-473》



写真6 馬飼いのムラ(5C前半)
《八尾南遺跡第8次調査》



写真7 木製鞍〔前輪〕(5C前半)
《八尾南遺跡第8次調査》

平成27年度のイベントから

●秋季企画展関連講演会の開催

2015/10/25(日)、2016/1/24(日)

秋季企画展「やおの古墳時代〈中期～後期〉-渡来文化とくらし-」に関連して、「古墳時代中期の中河内地域の渡来系文化について」「古墳時代前期後半から倭の五王時代の中河内」と題した講演会を2回開催しました。

多くの市民の方々が参加され、講演後に数多くの質問が寄せられるなど、倭の五王時代に対する興味・関心の高さを改めて実感する講演会となりました。



●大人のための考古学入門講座

2016/2/6・13・20(土)

大人を対象とした考古学入門講座を行いました。3日間にわたり、「時代を探る技術」「時代を測る物差し」「道具から時代を見る」と題した学習を行いました。

発掘調査の方法や地層・地形の見方、本物の土器や石器を使った体験学習や銅鏡製作を通じて、考古学への興味・関心がより高められたことと思います。



久宝寺遺跡第24次調査出土の5世紀代の南九州系土器と物部氏について

久宝寺遺跡第24次調査(龍華町一丁目)で検出された、柱穴が建物内部の輪郭に沿って配列された畿内でも類例が無い5C中葉～後半の竪穴住居から南九州系の成川式土器(大型壺・小型壺・高杯)が発見されました。これにより、5Cの河内地域において、南九州地方からの移住民、所謂「隼人」の存在が明らかになりました。この事例は近畿地方において唯一のもので、当時の南九州地方と倭政権との関わりを考えるうえで極めて重要です。『記紀』にみる南九州地方との関わりでは、日向国諸君の娘髪長媛が仁徳天皇の後妃になるなどの関係がみられます。隼人の存在としては、『日本書紀』履中即位前記の「刺領巾」(『古事記』では曾婆訶理)や雄略天皇の崩御に際して殉死した隼人の存在が記されています。このように5C中頃以降においては天皇の側近(近習)に隼人がいたようです。調査地点が5～6Cに倭政権内で政治の中核を担った物部氏の本貫地にあたるため、大連クラスの豪族には天皇と同様、隼人が従属していた可能性が高くなりました。



写真8 竪穴住居(S I 31001)検出状況

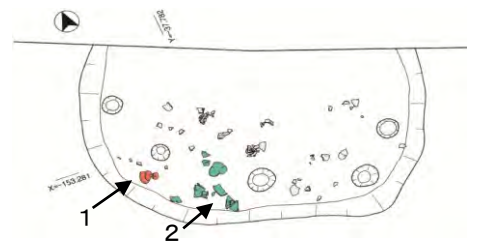


図2 竪穴住居(S I 31001)と南九州系土器出土位置

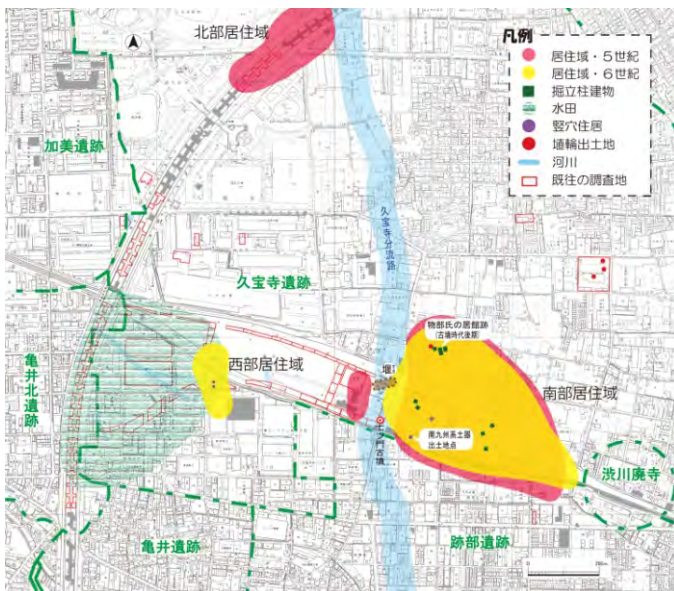


図3 久宝寺遺跡の古墳時代中期～後期の集落位置図



写真9 南九州系の成川式土器 (1-高杯、2-大型壺)

編集後記

二十四節気や身近にある神社仏閣などで行われる数々の祭事で、日本人は古来より季節の移ろいを五感で感じてきた。

昨今は、ハロウィン、クリスマス、恵方巻き、バレンタインデーなどの和洋の祭事を含めて日本の歳時記になっている。本来の趣旨などお構いなしに、商業ベースにのせられて楽しければ良しとする風潮が罷り通っている？

しかし、よくよく考えれば、日本人は生まれて神社に参り、結婚して神に誓い、死んで仏に随う節操が無いのが日本文化の特徴と言えはそれまでである。

どうやら、これらの日本気質の形成は、渡来文化や仏教文化の吸収を推進した古墳時代中期～後期にあったと思えてならない。『Why Japanese People!?!?』と叫んでみた。

(MH)

イベント案内

◆通常展「八尾の地宝—埋蔵文化財調査センター収蔵品—」

内容：八尾市域から出土した旧石器時代から奈良時代の遺物を中心に展示

期間：平成28年2月24日(水)～6月10日(金)

時間：午前9時～午後5時(入館は午後4時半まで)

休館日：土、日、祝日

◆講演会等「やお・埋蔵文化財トーク—あの遺跡・遺物は今—」

演題：3世紀の外來系土器—成法寺遺跡周辺を中心に—

講師：西村公助 (当施設学芸担当)

日時：平成28年5月22日(日)午後1時30分～(先着30名、資料代200円)



八尾市立埋蔵文化財調査センター情報誌

『八尾・よろず考古通信 第14号』

発行：2016年3月31日、八尾市立埋蔵文化財調査センター

(編集：公益財団法人八尾市文化財調査研究会)

〒581-0821 大阪府八尾市幸町四丁目58-2

TEL・FAX 072-994-4700

E-mail maibun.zyao@kawachi.zaq.ne.jp

